掲載日:2014年08月18日，面名:社会，記事ID:KIJ20140818_A0027000100532002
(C)沖縄タイムス社

取材船 遮る海保

名護市辺野古の新基地建設をめぐり、「過剰警備」との指摘がある海上保安庁の矛先が、取材する報道機関にも向けられている。17日は海保のゴムボートが約15分にわたり、本紙記者を含む4社相乗りの取材船につきまとい、撮影を阻んだ。識者は「『海上の安全確保』の名目が拡大解釈され、公共的な関心の高い基地問題の取材を不当に妨げている」と批判する。（矢島大輔）＝1面参照

ルポ 安全の拡大解釈

突然接近 撮影阻む

辺野古 刻々

17日午前10時、本紙記者らが乗る取材船は辺野古の海上にいた。ボーリング調査用のスパット台船を組み立てる様子を撮影するためだ。突然、海保の黒いゴムボートが水しぶきをあげ急接近してきた。職員が拡声器を通し、こちらに向けて叫んだ。

「危ないですから。沖へ離れてください！」

海上の波風は穏やかで、雨は降っていなかった。水深も十分あり、座礁する心配もない。取材船の船長によると、昨日は許された立ち入り制限区域外の地点だったという。念のため、船長が「どこが境界線か教えてください」と尋ねた。

しかし、職員から返事はない。拡声器から繰り返し、大きな声が飛んでくるだけだ。「作業現場は危ないです。あなたたちの安全のためです！」

作業現場は米軍キャンプ・シュワブの浅瀬。取材船からはるか遠くにあり、スパット台船は肉眼で米粒程度にしか見えない。「余計なお世話ですよ」と、船長はあきれながら言った。

ボートはその後、取材船と作業現場との間に船体を入れ、撮影を遮った。

記者は前日、海保の指示に従うよう求める同意書に、別の取材船の船長が半ば強引に署名させられたのを目撃したばかり。「取材妨害じゃないですか」と問うと、それも無視された。真横に移動しても、ボートはつきまとってきた。取材船は港に引きあげるしかなかった。

海保職員は終始、サングラスをかけ、口をへの字に結んでいた。ただ、ボートには県民であることをうかがわせる「中城」の文字が記されていた。「（甲子園の）沖縄尚学の結果を気にしてるんじゃないか」。誰からともなくそういう話になった。

他社の記者が去り際に勝利したことを伝えると、職員はわずかに表情を崩したように見えた。（随時掲載）

取材船に乗った本紙記者らによる、キャンプ・シュワブの浅瀬での台船設置作業現場の撮影を妨害する海保のゴムボート。「危ないですから」とスピーカーで繰り返し、約15分間視界をさえぎった＝17日午前10時5分、名護市辺野古

知る権利尊重を

専修大の山田健太教授（言論法）の話　海上保安庁は立ち入り制限区域の境界線を恣意的に引き、外側の行為でも意図的に近づけないようにしている。同庁法第2条の「海上の安全、治安の確保」が根拠と説明するが、拡大解釈している。明らかに危険を呼び起こす急迫不正の行為に限るべきだ。辺野古の新基地建設問題は公共的な関心が高く、取材行為は市民の「知る権利」に応えるものだ。市民が抗議する「海上デモ」と、報道機関の取材行為は憲法が認める「表現の自由」に基づいており、最大限尊重する必要がある。